

日露戦争時・鳥取県域へ漂着したロシア兵（ダイジェスト版）

鳥取県立公文書館

明治 38（1905）年 5 月 27 日から翌日にかけて行われた日本海海戦後、日本海沿岸各地で多数のロシア兵の遺体の漂着や沖合での回収が行われた。鳥取県域については、詳細な調査報告があるが、本県においては未だ調査、報告が行われていないため、資料調査及び現地調査を平成 23 年 3 月から 6 月にかけておこなった。その概要は以下のとおり。

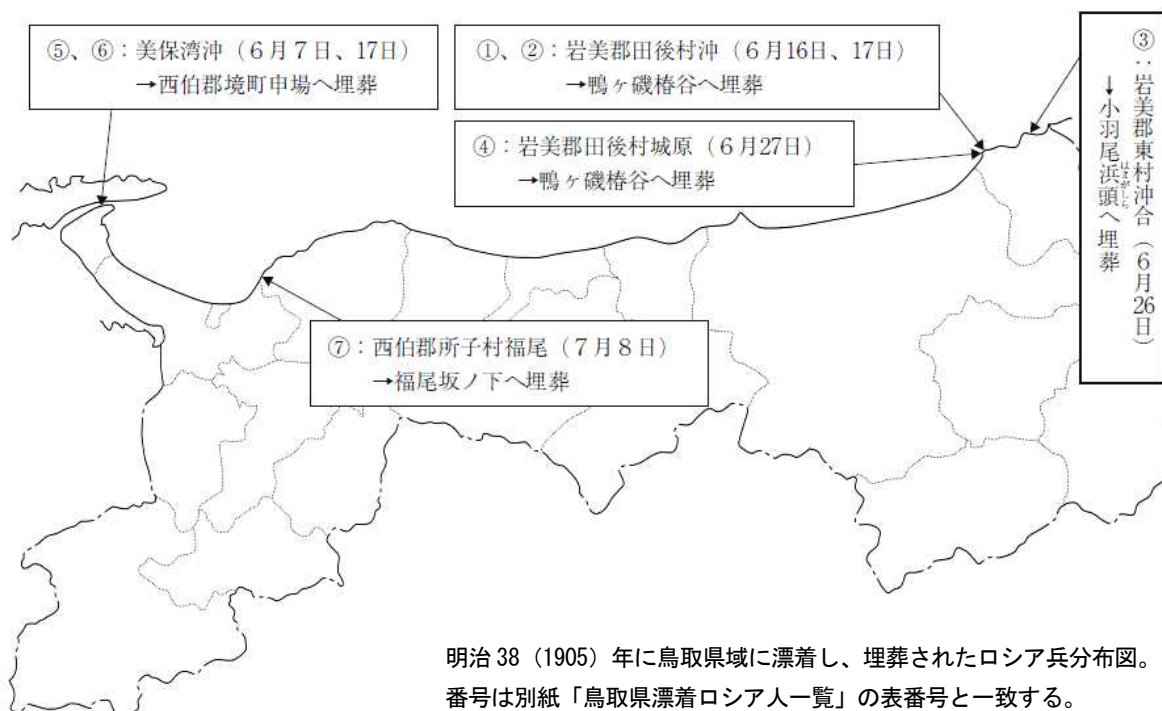
1 鳥取県におけるロシア兵の漂着の概要

明治 41 年末ロシア帝国政府の要請により、我が国の内務省から沿岸部の各府県に対して出された漂着ロシア兵の調査に対する関係府県の回答は、以下のとおり総数 71 体である。

青森	秋田	新潟	富山	石川	福井	京都	鳥取	島根	山口	長崎	総計
2	1	11	1	10	2	2	7	26	8	1	71

上記のように、明治 41 年末に本県知事から内務省に提出された報告書には、本県におけるロシア兵の遺体の漂着、回収が 7 体であったことが明記されている（別紙一覧参照）。この報告書には遺体の漂着及び回収地、日時、氏名、埋葬地等が記載されている。漂着と同時代の公的な資料であり、その記述の信憑性は高く、鳥取県域における実態を示すと考えられる。

《典拠資料》国立公文書館所蔵『警保局長決裁書類・明治 42 年』



2 岩美町の事例 (別紙一覧—1、2、3、4)

岩美町内では、田後地区で2体が回収、小羽尾地区に1体が漂着とされてきたが、田後地区は3体であったことが判明。新たに判明した1体は同地区城原海岸に漂着(別紙一覧—4)。また、小羽尾地区のものは従来、漂着とされてきたが、漂流中のものが回収されたものであることが判明。



田後地区城原海岸

漂着、回収に関する『鳥取新報』(日本海新聞の前身)の記事は別紙一覧の記述と完全に一致。

田後地区の1体については、同町岩井地区の西法寺の過去帳に、小羽尾地区の1体については、同町陸上地区の隣海院の過去帳にも記載あり。



西法寺



隣海院

岩美町役場が保存する旧田後、東村役場資料には当該記載なし。

埋葬地は、田後、小羽尾両地区のものともほぼ特定ができる。田後地区の埋葬地である鴨ヶ磯椿谷には昭和37年6月に初代国連大使を務めた同町出身の澤田廉三氏が自費で建てた「露軍将校遺体漂着記念碑」とそのいわれを記した顕彰碑が建つ。また、昭和63年からはロシア(当時はソ連)大使館の職員を招いて5年毎に慰霊祭を開催。小羽尾地区も平成6年5月に埋葬地付近に「露国軍人碑」を建立。

《典拠資料》『日露戦役岩美郡誌』、『岩美町誌』、『田後村郷土調査』、『詳解田後史年表 方言集・論説』、『美保関町誌』、明治38年6月20日付『鳥取新報』、同年6月30日付『鳥取新報』、同年6月28日付『鳥取新報』



露軍将校遺体漂着記念碑（鴨ヶ磯椿谷）



露国軍人碑（小羽尾地区共同墓地）

3 境港市の事例（別紙一覧—5、6）

『境港市史』にごく簡単な記述があるだけで、実態はまったく不明であった。別紙一覧から2名であること、いずれも美保湾を漂流中のものが回収されたことがわかった。この他、ニコライ主教の日記にも記載があり、別紙一覧の内容とまったく一致する。更に『鳥取新報』の記述や1名については、境小学校に残る『学校日誌』、松江で発行されていた『山陰新聞』からも確認できる。ロシア兵の遺体が境港市内に埋葬されたという事実を地元の郷土史家を含め、ほとんどの市民が知らない状況は、岩美や下記の大山町福尾地区と大きくことなる。

また、埋葬地とされる「申場」（現在の境港市米川町あたり）は確定できるが、埋葬地の特定はできていない。理由は、昭和10年の境町大火、昭和20年の玉栄丸爆発事故により役場資料や寺院の過去帳の焼失などの記録資料の焼失のためである。申場付近の光祐寺の過去帳も調査したが、記載なし。

境港市役所及び境港市史編さん室が所蔵する旧境町役場資料中には記載なし。

岩美町のような慰霊碑は存在しない。

《典拠資料》『上道村雑記』、『境港 昔と今』、『境港市史 上巻』、『宣教師ニコライの全日記 第8巻』、『明治38年度 学校日誌（境尋常小学校）6月7日』、明治38年6月20日付『鳥取新報』、同年6月10日付『鳥取新報』、同年6月10日付『山陰新聞』



現在の申場付近。手前の川は米川。林の奥で「深田川」と合流し、境水道に注ぐ。

4 大山町の事例 (別紙一覧7)

『大山町誌』にはまったく記載がない。ただ、昭和43年に福尾地区が出版した『郷土史福尾』の中にかなり具体的な記述がある。このロシア兵の場合は漂着である。この他、『鳥取新報』及び『山陰新聞』にも記載があり、別紙一覧とほぼ記述が一致する。地区に古い地籍図が残されており、その中に記される「墓地」の場所と地元の方々が伝え聞いている場所が一致し、埋葬地はほぼ特定できる。福尾地区の旦那寺神宮寺(大山町国信)の過去帳及び黒住教大山教会所の過去帳には記載なし。



福尾の海岸。うっすら島根半島が見える。



海岸側の防風林の中に墓があり、ここに埋葬された。

大山町役場が所蔵する旧所子村役場資料中には記載なし。

地元の方々は史実をよく知っているが、岩美町のような慰霊碑は存在しない。

《典拠資料》『郷土史福尾』、明治38年7月12日付『鳥取新報』、同年7月13日付『山陰新聞』

5 『鳥取新報』の漂着ロシア兵の扱い

『鳥取新報』では、本県下で漂着、回収したロシア兵を手厚く葬り、漂着した場所に碑を建てるといった意見や県下に散在するロシア兵の遺体を一括して合祀すべしという意見が掲載され、注目にあたります。

《典拠資料》明治38年7月19日付『鳥取新報』

6 遺物の漂着

遺体以外にも多くの遺物が県内で回収されていることが新たにわかった。これらは県中部の沖合いで回収されたものである。

- ・ロシア軍艦旗の回収：東伯郡三橋村宇谷(現湯梨浜町宇谷地区)沖合い
- ・信号旗、浮き輪、船窓の戸、鷲型の船首、袋、机など：東伯郡赤碕町、八橋町、逢東村(現琴浦町)の漁夫が拾得

《典拠資料》明治38年6月24日付『鳥取新報』、同年7月1日付『鳥取新報』

7 埋葬地の実態把握へ

ロシア正教の宣教師として30年以上にわたり、日本に滞在したニコライ主教は、明治41年捕虜收容所収監中に亡くなったロシア兵の慰霊のため、松山へ向かう。帰京後、ニコライはロシア大使や駐在武官などを通して收容所以外に日本海沿岸部で回収、漂着したロシア兵の遺体の実態把握をロシア政府に働きかけ、これが鳥取県が作成した別紙一覧の作成へとつながる。

このようなニコライの行動の直接的なきっかけは、境港市（当時は境町）での出来事が大きい。ニコライは、松山からの帰路、多数の遺体が漂着した隠岐島へ慰霊に向かう途中、境町に宿泊するが、当地にも2体の遺体が埋葬されていた事実を確認する。だが、戦後3年半ほどしか経過していないにもかかわらず、埋葬地が簡単に判明できないような状況であった。全国各地にも同様なことが生じていることに危機感を感じたニコライは、駐日ロシア大使館を通じてロシア帝国政府に日本全国の調査を働きかけたのである。日本各地の漂着ロシア兵の実態調査実行の最大の立役者はニコライであるとともに、彼に行動のきっかけをつくったのは本県境港市での出来事であった。

《典拠資料》陸軍省編『明治三十七八年戦役俘虜取扱顛末』（有斐閣、明治40年）、防衛省防衛研究所所蔵『明治39年「満大日記5月上」』、『宣教師ニコライの全日記 第8巻』、『同 第9巻』

8 長崎市への改葬

日露戦では開戦直後から、双方とも捕虜の待遇や戦死者の取扱いについて詳細な規則を定めていた。日露戦の激戦地であった満州方面では戦時中から遺体の埋葬や合葬が行われてきた。日本政府も最大時国内に29ヶ所あった捕虜收容所に収監中死亡したロシア兵の墓を一括して管理したいと考えていた。一方、ニコライ主教の働きもあり、ロシア政府から日本政府に日本海沿岸部に埋葬されているロシア兵の調査の打診があったこともあり、日本政府はこれらのロシア兵も一括して長崎市へ合葬する提案をロシア側に出し、ロシア側も了承した。ただし、日本政府としては、ロシア人が墓参名目に日本各地を訪問することを好ましく考えていなかったのも事実である。ただ、双方の思惑はことなるものの、究極的な目的が一致したため、明治42年9月27日にニコライ主教も臨席のもと長崎市で合葬祭がおこなわれた。

各地の遺骨は、恐らく明治42年6月から8月までの間に掘り出され、長崎市へ移送されたはずである。鳥取県でも、明治42年10月1日付海軍省から鳥取県知事宛の改葬費精算書が残されていることから遺骨は全て長崎市に改葬されたと考えられる。

《典拠資料》『宣教師ニコライの全日記 第8巻』、『同 第9巻』、防衛省防衛研究所所蔵『明治43年乾の下「式大日記1月」』、明治42年5月26日付『山陰新聞』、同年7月22日付『山陰新聞』、同年42年7月29日付『山陰新聞』



長崎市稲佐町にある悟真寺の山門（写真左）。藩政時代前期から唐人墓地やオランダ人墓地を有し、幕末からはロシア人墓地も開設された。本堂は原爆で焼失したが、昭和 34 年に再建された。悟真寺の境内内にあるロシア人墓地（写真右）。戦後、荒廃していたが、平成 8 年、ロシア海軍創立 300 周年を機に整備された。（長崎市撮影提供）

まとめ

本県で埋葬されたロシア兵 7 体のうち、漂着したのは岩美町田後地区の 1 体と大山町福尾地区の 1 体の計 2 体のみで、残る 5 体はいずれも海上を漂流中であつたものを漁師らが回収したものであつた。往々にして漂着と一括りにされてしまうが、厳密には状況はまったくことなる。

本県の場合、県、郡、市町村の公文書にまったく関連する記録が残らないため、不明な点もあるが、島根県の公文書を見ると、政府は早い段階からロシア兵の遺体が日本海沿岸部に漂着する可能性が高いことを認識していた。

例えば、八東郡から管下の町村に出された訓令であるが、
「八東郡訓令兵第一九号

片江村役場

沿海ニ於テ拾揚ケタル敵ノ屍ハ仮埋葬ノ際被服ノ^ア徽章其他所持品等後日ノ証憑トナルモノ
ヲ保存シ且ツ為シ得レハ埋葬セラレタルモノノ隊号階級等ヲ識別シウル如キ処置ヲ取り、詳
細ニ報告スベシ

明治三十八年五月三十一日

八東郡長 村上寿夫

とある。つまり、島根県の場合、県→郡→市町村とロシア兵の遺体の取扱いに対する細かい指令が出されており、当該市町村は原則、その指示にしたがって埋葬していた。これは鳥取県の場合も同様であつたはずである。

また、日本とロシア両政府は、当初、捕虜収容所内で死亡したロシア兵だけの合葬で済まそうとしていたが、境港市の現状に衝撃を受けたニコライ主教の強い働きが、ロシア帝国政府そして日本政府を動かし、日本海沿岸部に埋葬されたロシア兵の調査と長崎市への合葬に結びついたのである。


岩美町や大山町福尾地区では地元の方々がロシア兵の漂着について、よく知っていたのに対し、境

港市ではほとんど知られていない。これは岩美町や大山町福尾地区の場合、郷土史などが記載していたり、親、祖父母からの口伝が大きな役割を果たしたと思われる。それに対して境港市は2度の災害や戦後の人口の移動により伝承が途絶えてしまった可能性が高いと思われる。

最後に、岩美町や大山町の郷土史が日露戦後にロシア人が遺骨を回収し、「故国へ持ち帰った」（岩美町）、あるいは、「ロシアから遺骨を取りに来て持ち帰った」（大山町）とするが、長崎市へ改葬されたことにはまったく触れておらず、遺体が長崎市へ改葬されたという事実は現地でもほとんど知られていない。

稲佐のロシア人墓地は、昭和20年8月1日の空襲、同月9日の原爆により大きな被害を受け、その後荒廃したままであったが、平成8年になり整備された。この間、多数の墓碑が消滅し、現在では鳥取から改葬されたロシア兵を確認することはできない。

(別紙) 鳥取県漂着ロシア人一覧

7	6	5	4	3	2	1
明治三十八年 七月八日	明治三十八年 六月十七日	明治三十八年 六月七日	明治三十八年 六月廿七日	明治三十八年 六月廿六日	全	明治三十八年 六月十七日
西伯郡所子村 大字福尾村海 岸	全	西伯郡境町字 台場先海岸	岩美郡田後村 字篠原海岸岩 穴	岩美郡東村大 字小羽尾村三 里許沖合	全	岩美郡田後村 海岸ヨリ凡ソ 十里許ノ沖合
不明	不明	ヤコフ、ミハイイロフ、ビ ーヨンカノ死体ト推定		不明	露国ベートルブルグ市ボクロ ーフカヤ広場第二〇六番戸第 六号「ニコライ」ツミツクエ フノ死体ト推定セラル	不明
三十才位	四十才位	四十才位	三十才位	三十才位	三十五才位	二十五才位
露国海兵ト 推定	露国海兵ト 推定	露国工作船 「カムチヤ ツカ」号乗 組員ト推定		全	全	露国海兵ト 推定
メリヤス木綿様シャツ二枚ノ上ニ黒羅紗洋服ヲ着シ「コロツプ」ヲ 「ツツク」ニテ包ミタル救命浮環ヲ苦繩ヲ以テ堅ク結束シ而シテ首 ニ板金製ノ十字形ノモノ二個ヲ掛ケ居レリ	裸体ニシテ所持品ナシ唯タ手首ヨリ一寸余上方右腕内部ニ下図ノ 如キ刺文アリ其所屬等不明 	黒羅紗上衣一枚及襪衣一着用シ居リタリシモノニ附着セル文字等 不明ナリ右ノ外救命具一手帖用ノモノ三冊並ニ所持品ハ日本通貨 ニ換算シ凡ニ錢五厘アリシモ手帖ノ如キハ浸水日久シカリシ為メ カ文字等更ニ不明從テ其所屬不明	死体ハ裸体ニシテ付属品ナク其所屬等不明 	肌ニ白キ網シヤツト白色チヨツキ(釦ハ鏽形付キ)黒羅紗ズボンヲ 着シ又毛糸製ノ靴下及左足ノミ黒羅紗内側赤色ノ半靴ヲ穿ケ居リ 附着ノ救命具ニハ方二寸大ノ下図ノ如キ黒色印アリ	浅黄色金巾ノ如キシヤツツボン下ノミニテ服装ナクシヤツノ隠シ ニ一葉ノ小書アリ僅カニ住所氏名ヲ推定スルヲ得タリ而シテ隠シ ニ次記ノ物品ヲ所持ス金貨十五個内二個ハ小形銀貨十五個銅貨一 個十字架一枚紙幣一枚鉄葉製巻農入一ケハンカチーフ一枚	花色ノ如キ薄羅紗ト見ルヘキ上衣ツボンヲ着シ上衣ツボンヲ脱ス レバ白地・浅黄ノ横筋入りノ金布様ノシヤツツボン下ヲ着シ居ルモ 其他所持品ナク所屬等不明
西伯郡所子 村大字福尾 村墓地	全	西伯郡境町 字申場	岩美郡田後 村字鴨ヶ磯	岩美郡東村 大字小羽尾 村字浜頭	全	岩美郡田後 村字鴨ヶ磯

(注) 明治41年12月16日付 告森良鳥取県知事から内務省警保局長有松英義宛て報告書より作成。